

Tabibito

麻生路郎句集

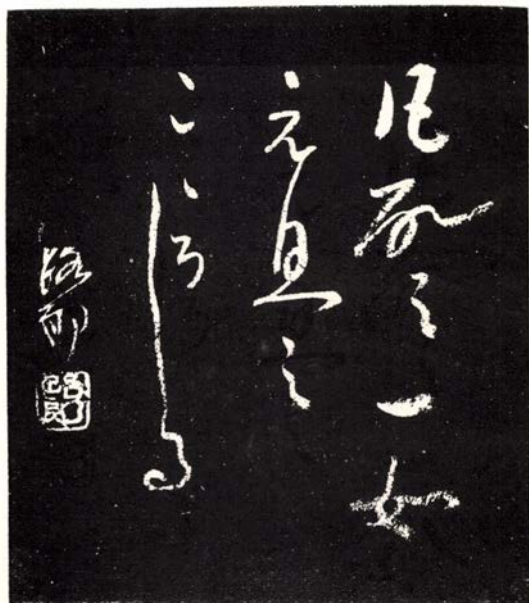
旅人

川柳雜誌社版





影 近 者 著



凡聖一如元の如く知る

子澤山僕のまくらは何處へいた

子澤山僕のまくらは何處へいた

おれに似よ俺に似るなと子をおもひ

おれに似よ俺に似るなと子をおもひ

さけとろりとろり大空のこころかも

さけとろりとろり大空のこころかも

麻生路郎句集 目次

旅 人

人生の雑音

一

大 空

李伯の末裔

一七

戀ごころ

一九

愛 慾……………三六

不死鳥

水の垢……………三五

前書のある句……………六五

旅つれづれ……………六一

索引……………六九

題字
裝幀

麻生路郎
田村孝之介

自序

エスペラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉らかつた。
ロシヤ文学の英訳に一生を捧げたマガレット夫人は偉らかつた。くそ
虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉らかつた。何れも自
分の夢を実現させた人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？私は云うべき言葉を知らない。

川柳の社会化運動と 一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていな
い。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。

一九五三年十一月三日

麻生路郎識

はしがり

★一般に句集の編纂は年代順に配列されているようであるが、本句集はそうした方法によらなかった。

★五十年間に詠みすてられた句の蒐集となると、それ事態が一大事業であつて、私のような多忙な人間にとつては到底なし得ることではない。従つて私の初期の句や他誌に発表した句などは殆んど採録しなかつた。

★本句集は主として「川柳雑誌」の創刊号（一九二四）から最近号（一九五三）までの作品から自選したものである。尤もそれ以前に私が刊行した柳誌「雪」「後の葉柳」「土団子」などからホンの少しばかり拾つた。それは私のノスタルジアとでも云えよう。

★本句集は「旅人」「大空」「不死鳥」の三部に大別した。それを更に私の好みで「人生の雑音」「李伯の末裔」「恋ごころ」「愛慾」「水の垢」「前書のある句」「旅つれ／＼」と小別した。これは、普通

の本のように、順序を趁うて読まなくても、どこからでも欲するところを開いて一句一句を味つてもらい、私との思想の交流を切望したからである。そして私自身も読んで下さる諸氏の懷に飛び込みたいからである。旅を詠んだ句は私に思い出の數々を再演してくれて忘じ難いものではあるが、私と同じ環境に置かれていない人達にとつては興趣が半減されることを思い、身近なものをホンの僅ばかり発表したのに過ぎなかつた。これは機会があつたら、旅行記と共に纏めて見たいと思つてゐる。従つて異郷で詠んだ句などは一切割愛した。

★句の配列を棒組みにせず、一行に、二行に或は三行にしたのは、大凡そ私の呼吸によつて読んで欲しかつたからである。曾て私が刊行した「新川柳評釈」の序文に「句はその人のところである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と書いたのを思い、私の呼吸をある程度知つてもらいたいたためでもある。

★私の句は私の生活からにじみ出た句であるが、その句のすべてが、事実を根元として創作されたものであるかと云えば、必ずしもそうで

はない。しかし、眞実をつかむためには、及ぶかぎり心を碎いた。

★私の句はどちらかと云えば淋びしい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が峻しかつたからでもある。要するに私は川柳によつて人間愛を求めてやまなかつた。

★句はつとめて判り易いことを念願として来たが多少は難解の句もあるうと思う。

★以前の句は旧仮名遣いのままにしておいた。一寸読みづらい気もするが多少とも時代が判つていいかも知れないと思つて、ワザと統一しなかつた。

★本句集は私が川柳に手を染めてから、本年の五月で五十年になると云うのでその記念に私を愛する人達によつて上梓されたものである。私の光榮これに過ぎるものはない。たとえ一句でも共鳴される句があれば望外の欣びである。

旅
人

江
雨

人生の雑音

二階を降りてどこへ行く身ぞ

見渡すと
ユダのころを
みんな持ち

天井にいつまでおさへられて生き

往來で
夢を見てゐる男にて

大臣になれぬことだけわかつたり

紙屑をまるめてすてるに等しき

お元日坐るところへ坐られ

居候も
おんなじやうに
家をあげ

往診の誤診を
飯を食ひながら

戯れに死ねば
こころやすからん

今日も店にゆきたるのみ
机のほこり

ひとり立てば
風ふところに入りけり

無常とや
猫も錦魚も死んで見せ

奥様一人天井が鳴る

鯛 鯛
焼 焼
け け
ば ば
鯛
の 臭
ひ が
残
る 也

く び
き り
へ
今 日
は
秋
立
つ
日
な
り
け
り

お互ひの世にせうとして
かゝがたち

もう叱るばかりの
宅と思つて居

寢
転
べ
ば
疊
一
帖
ふ
さ
ぐ
の
み

まけて呉れる頃の茄子の小さくて

齒が痛い
さうかと亭主出てしまい

お前達は疊の上の資本論

食ふべくもないのに
被てる
絹の羽織

滅私奉公だなんて云っていたボス

あの女
この女
みな十九なり

嘘をまろめて
書齋けうとし

その日ぐらしも
軒に雀が
こぼるよ

日あたり
のいい
うちだ
が
物足り
なさ
に
変り
ない

戯れに
ついても
淋し
鐘の
巾

冬は尖つて金のこといふ

P T A
こ こ で も 労 資
せ り あ ひ

証文は要らぬ
しつかりやりたまへ

祈つた甲斐もなく共産党の中にある

鯛一疋で人間の騒ぐこと

嫁入りをして
大劇と
縁が切れ

それが世の中ですとは
けちなこと

売る土地があつて
老人折れて出す

金は無くとも
金は無くとも
君と僕

わが世とぞ思ふ
春にはならざりし

寒うおまんなアと
藝者も年をとり

人間にしてやろと云ふ嘘をつく

撞^た球^まよころべ
こころを吸ふて
ころびゆけ

女の浴衣が
のれんとなつて
揺れ

資本家はキャラクターまで買ひたがり

妾となつて奪^とるも戦術

機械の一部
それが
人間なんだとさ

独り身へ
余所の時計が鳴るのなり

神 經 衰 弱 の 死 で な い こ と を
書 い て お く

他人らしくしたといふのが
ものもと

おしやべりはきらい
わが妻ならずとも

運を待つやうに此の頃仿かす

機械化の
その群衆へ
溶けこまう

車庫の裏から
街へ何しに

悪運つきず資本家の端

つまり胃が
弱いのに
やと突き放し

てにをはのあはぬ
悔みと
なり
にけり

おべつかが
米の飯とは知らざりし

暴力はよし
キリストも殺される

青空に
藝者を連れた莫迦らしさ

てつちりへ
社長が先に箸を入れ

いつまでも
肉と葱との
仲であれ

弱点を握られて居て二号にし

老人は
元祖に
されて
気を
よくし

急所とは
知らずに云つて
左遷され

会社では
横顔だけが
見える位置

嘘を云ふたがどうしたに困るなり

女中の子
血の冷めたさ
を思ひゐる

職責で窓が一つの中に生き

その嘘に
女は縋りついてゆく

嘘と嘘
女はいよいよ美しく

にぎりやのことも知つてゐる

雇^や仲^と居^な来る

朝鮮の如く
会社もつぶれそう

書齋はいいがゐた事はなし

お互ひがみな病院に
ゐるとも知らず

混雑の中で売名忘れない

聞いてゐれば十人ばかり投げたやう

失明に
学者としての名があがり

苦々しがれば
それから
よりつかす

寄り添へと云はぬばかりに
風が吹く

十二月剃刀持つて怖がらせ

夫より通帳かよひの方を頼つて居

おしやべりの中にも
夫人虚栄が出

心にもない約束が
明日^あ日^すとなる

死は強し
もう女中ではありませぬ

一口もさかぬ強さを持つてゐる

蝙蝠よ
僕も裏切者にされ

追放を
けつくよろこぶ
妻を持ち

もう僕も
長い食事の連続さ

もしひよつと
妻が
死んだらなと思ひ

医者が死を早めたことを
誰が知ろ

畳も匂い初刷も匂い

人妻のあまりに長き袂なる

軍服で来ても
ヤツチヨロまかせを踊り

パチンコの
煙草かいなと
喫われて居

幻の中に時計が鳴つてゐる

君。君
もう少し静にし給へ 蠅

会社が仆れるかも知れぬ世にゴルフ

一生は腐つた梨に
さも似たり

弁護士も家賃の方は滞り

サンシーもあるけど
二三人は生み

長靴が
へびにも見へて
灯がともる

豚の子へ続く
豚の子ばかりなり

一ンち違ひで
甘田が死んでしまつた

大きなものに
その影さへも奪はれて

善人が滅びつつある寂しさに

只一句
超生活の句を遺し

大杉を殺ろし思想を取り逃がし

君見たまへ
波菰草が伸びてゐる

まだ嘘が
半分はんぶんまじつた
辞世なり

元日の卓上日記晴とだけ

時計にまでうつる神経衰弱症

春のすえ
気違ひじみた手紙が来

天才へ
親類あんなものと云ひ

千田がまだたまらない仲居なり

遊ばしもあるが

意見もする
女将おかみ

太
つ
た
を

娘

片
輪
の
や
う
に
い
ひ

雑談の前に
お布施がさらされる

駈落に
旅の花火の
淋しうて

二階のへ
火種をあげて
疑はれ

お見舞と称し
如己堂見にこられ

あの記事も
私が書いたやうにいひ

もう世辭を世辭として聞く
年になり

貧しさに
だんだん仲
がよくなつ
て

あきられ
豆腐ばかりと
やうもまあ

人間のあわててたべたさもしい気

これ以上には
痩せられぬ
痩せられぬ

出世なごもう問題にしてはゐす

家へ帰れば
社長は社長
僕は僕

後家の相談
こそばゆく聞く

生活を出すと
顔に出すと
いふてたに

ふと眼をやれば煙突にけむりなし

限　ひ　ひ
　　り　と　と
　　な　り　り
　　く　は　ゐ
　　さ　　れ
　　び　　ば
　　し

収入の足りないところで
うまがあひ

有限もよしとおもへり
米の嵩

なすびも
おばあさんも
小さくなつてゆく

そろばんの三桁四桁の人生か

裸の外に
うらやま
れるもの
を
持たず

あ　あ　日　向
五　尺　の　影　と
知　る　も　憂　し

天　井　へ　聞　か　す　講　義　と
知　ら　ざ　り　き

天才か痼癢持ちと思ひしに

ぬけさくの扱ひされて
詩に知られ

腰のひくいことも
家主にひけをとる

店子店子とただで貸すやう

肩書が役にも立たぬ十二月

小新聞の
主筆にて
五ツ紋候

しづかさは白髪の話などをして

気の弱いくせに鱗の帯をしめ

鹹になつた人の名刺が
メモにされ

春の僕ただ良寛をこころざす

重役もいいが会社は葬式屋

色仕掛けでも追つかぬ十二月

煙突の横とは
初日哀れなり

うぬぼれを左様々々と片附ける

僕 時 計 が と ま つ た 淋 し さ で す よ
に も

凡聖一如
元旦の如
こころ知
る

友達に別れた時がお元日

元旦も二階
二日三日も二階に居

ビルの窓
誰を呼んで
るのでもなし

総 辞 職
犬 も 一 緒 に 引 き 揚 げ る

総 辞 職
再 び
松 の 風 を 聴 き

西部戦線わが童貞に異状なし

春の日は
ねまきのままで
暮れてゆく

子が死んで葱や菜ッ葉の乳母車

本復をして辛辣な口をきき

云ふだけは云へ云へ
若さ失ふな

銀行のお世辞も気の腐るものの一つ

この腕を見よと
脱税してゐたり

二・二六事変

春寒し拾ひ手のない首二つ

身代りの
緋緘しぐらゐ着てて欲し

翻へる文字は
帰順の外になし

煉瓦の下の
みみずの如く
生きるのみ

桜かねと
落ちついてゐる
年になり

落人の
刺身に
箸もつ
けざり
さ

くびを
つれと
の
兵児帯
にはあ
らす

春の艸代議士なごに踏まれるな

突撃で別れたまんまそのまんま

ばんばんの
娘の方に
養はれ

幸福は
金庫の中
に
なかり
けり

トランクは
サイドも
知つて
いる

鉄が錆びたと同様に扱はれ

臨月へ
電話番号書いて出る

太を弾く
その健康を
みつめられ

エキストラ
雲を見てゐるのもまじり

失戀が
彼を
日曜画家にさせ

陳情に代表一人腰をかけ

世も末か
神様さへも
左り前

卷脚絆
卷いて貫つた顔もせず

私達と
複数で云う
愛しように

草の根よ僕も闘ふ草の根よ

玉 碎 す
逸 話 なん ぞ は な か り し が

良 心 が あ つ て
本 日 休 業 し

ラヂオ又英語で何か云うてはる

あの博士
今度は民主主義を売り

買出しと知つてか
牛は尻を向け

題 聖德太子之像

一ト握り ああ人生は和に如かず

搾取されてゐた
若き日をなつかしむ

三合になれば胃病をかこつらん

人柄が
焼け出さ
れても
足袋を履
き

古くとも僕には仁義禮智信

門出の日
牛へも言葉
かけてやり

還曆

六十一まだ情熱は燃えに燃え

芳紀まさに六十一を
ほほえまむ

ワイシャツもよれよれ
左派の左派に居て

無力な男
みすのやうに
ちみすのやうに
ちみすのやうに
だ

失禮々々
君の奥さんだつたのか

くすぐつたいよ
紙入なんかあづけられ

嫁
ですと
ひきあは
される
松の
内

ハガキすら
よこさなくな
り
寒いこと

中風だんねと奥にほつとかれ

総選挙
一票が悲しき支配力を持ち

保険金あてにされてるのをなげき

財産がハッキリわかり
養子逃げ

お互ひに
きつちり座
る
薄情さ

釣 筆
り 不
に 精
ゆ
く
ひ
ま
あ
り
な
が
ら

月　に　吸　は　れ
戸　も　締　め　な　い
出　て　行　つ　た
で

全壞と少し誇張もして寄越し

君止せよ
風見舞にまで商売気

颪風のあんな力が欲しくなり

瓦の飛んだ話
いつまで続くのか

鐘樓に鐘のないような暮らしして

彼の一生
雨の雨の
ままだつた

料理屋をさして貰えぬうちに切れ

斜陽族
仏壇までが小さくなり

正月も昔は紫雲たなびいた

追放解除
もとの一徹者になり

お婆さんに限り
死にたがり死にたがり

胸像も
主張をま
げぬ
面ヲ構え

死んだそうだと簡単に片づける

仲直り
口の軽さを封じられ

あんと一緒に
喰べますと
河豚料理

地震からやつぱし男頼りにし

金持だ
胃癌だ
いつの間にか死に

院長を
もみくちやにする
藝者が居

老人の日に旗竿が
まだ買えず

腐肉とは女の中のお女将さん

吹殻で
そのけちくささけちくささ

いつからか死後の準備もしてゐるなり

死 帰
ね れ
と と
い は
ふ
こ
と
に
も
あ
た
り

人類は悲しからずや左派と右派

労働基法の無視した
老いの徹さ

啄木祭に

あ　あ　僕　も
汽　車　を　下　り　し　に
ゆ　く　と　こ　ろ　な　し

お女将さんと云うてやるには
少し若し

あんたにプラスにならぬのなら
考えるわと
女

駅を出た村の子既に影もなし

鯉節に男のちからかるる

親船を離れて
きりきりと舞ひぬ

出鱈目に生きて
米寿もないものだ

うんそうだ
そりアそうだと
たかられる

壁に塗り込められたやう
人動かす

去年の子
今年の子
お玉杓子
か
ラ
ケ
ツ
ト
か

男ばかりで虫のいい話かな

しらじらしき悔みの淀ます

水溜り
飛びそこねても
一人かな

涼み船水の深さをききたがり

涼むのかと思や女はついとたち

定食へ
かひこが桑を食ふ如く

元旦だ
せめて
眼鏡を
拭きま
しょう

老人の日の告白に
妻が欲し

いつのほごにか
二号に養われ

戎橋さえも
いつしか秋
となり

銀行と縁もないのに忙がしく

貯金帳

忘れたころに出し入れす

大 空

李伯の末裔

酒とろりとろり
大空のころかも

樽据へて誰にも吞せたがる也

腰が抜けた話を
酒の肴にし

酔ふて来ると他人のお前なごといふ

酒女酒で
不惑に手がとごき

な
あ
ち
ろ
り
こ
れ
か
ら
秋
に
親
し
ま
う

人並にいけるといふが
酒のこと

酒がいつしか水になつて
る

吞ます気でゐるに資本家ののしられ

それから資本家吞ます事にきめ

さて吞むとなれば資本家先に酔ひ

一合の酒だに女口を出し

夫婦づれ
チツプの要らぬとこで呑み

二合 鰯 きつちり 酔ふて 先へ 去に

だまつて 呑むは 惚れて いる なり

マ ぎ
ル つ
ク か
ス で
・ 飲
エ ん
ン で
ゲ 来
ル て
ス の

火事か火事かと言うばかり
矢張り飲み

その書棚酔に乗じて買った本

坐食して
いるとも言へず
つけさせる

十二月首だけ入れて呑んで行く

現在に満足をして二三杯

君の酒はいいと云はれて松の内

飲みに来いと云い云い
春を甬守にする

大浜の丸万別館にて
三人が酔へば三人らしくなり

女のいない酒はさびしき

女房の予感は
呑んで来るにきめ

あほらしさおみきに酔うて寝たといふ

ビール
秋が来た
ビール
とて秋が
来た
とて

のみに来た友に家賃をきかれて居

君の顔で僕の顔でと
呑みにゆく

十二月まがりくねつたところで飲み

落ちついて呑むは雨傘持つていす

酎をのむぐらいの金は友も持ち

ではここでなごと別れて飲み直し

いつになく女の方が
呑むという

照り照りて
コップはひとりほつとかれ

ビールの泡を吹いて
話を
そらす気か

みな呑んでるぞ
ビールが散るぞ夏

まあまあといふが
コップが足らぬなり

焼酎は呑みなさんなと氣をつかい

誹風松竹梅の会にて

酒なんか呑んでいられぬ酒を呑む

元日を
飲み達
と
出
て
し
ま
ひ

箸紙を書いた手でもう
父は呑み

敬遠をされて一人で飲みに行く

酔うて来て
既に
零時をすぎた水

銃後 銃後
飲まずに辻で別れたり

ラウンドガール父の酒ぐせ思はされ

青春を呑むべく生れ来し如し

總ごころ

行末はごうあろうとも火の如し

嬌曳の影と
大根を干した影

初戀の思ひ出になる夏密柑

かん
にん
して
と
キ
ツ
ス
両
手
で
ふ
せ
が
れ
る

薄
情
な
日
傘
き
り
き
り
廻
す
だ
け

初戀も知らず博士は嫁をとり

ナフキンへ
誰が書いたか戀の唄

少女で通す
ちちはの前

衣摺れに
わくわく
したも
十八九

戀人が来ているらしい茶の間なり

戀人の匂ひ香水だけでなし

みだれ籠へ女小さくちぢこまり

木の葉をくつつけ
戀をむさぼる

女 遂に
微 熱のことは
云 ひ出さず

手紙では戀しいなぞとかいてなし

思ひきり惚れて
毒婦と
知らず死に

惚れられて
いるとは知らぬ
十三四

青空の
いよいよ青し
片思ひ

本妻があると知つてか死をいそぎ

かたくななことは云ふなと
あてがはれ

連れたのかくさんとしてよそよそし

藝者自身も
顔のことなご忘れて居

唇は
御意のまにまに
金となり

惚れて居るのに
ヨロヨロで胡魔化され

女中ではございませんと云ひたさう

気の弱いくせに船まで送る也

岐阜提灯の下で
背広を脱がされる

噂に聞けば仲居になつてゐる

ねエ愛して頂だいに
あきれさせ

襟垢をためて
戀でもあるまいか

船は行く行く戀人の顔小さし

拜まれて
女は
泊まる気にもなり

ふられたと見へておつりもやらぬなり

親類に十九の春がひとりいる

逢ひたかつた逢ひたかつたと裾をふみ

戀しさが
ありあり浮いた
洗面器

写真だけやうやう呉れただけのこと

若い燕切符を買うて渡される

猫入らず外にりんきの手を知らず

まゝ事のそのさいちうに保護願

転げ込んで行けば
女は疑ぐられ

友達をみんなだまして
南に居

逢ふだけでよかつたころの菜種咲き

のろけることを姉も妹も

きつちりと坐はれば
膝の女にて

二人きりしつべいなごをして遊び

眞似したりしてゐるうちに
少し惚れ

半襟をもらつたまんまそのまんま

まちぼけをさされてもまだ信じたし

うれしさと怖しさと
指環にて

そのころの女はいふがままになり

あの眼の中で男討死

たべさしを食うほど
男惚れている

炭ついで炭ついで女をうらむ

くされ縁だとは
女のづうづうし

桜は桜僕は君君

あ 戀
の の
眼 毘
だ
ら
う
か
眼
だ
ら
う
か

あつさりとふられた事を笑ひ合ひ

骨抜きにされた毒婦を諦めず

戀をしてるのよといひたい眼のあをさ

泣けて来るほごに恋しき君ならす

思ひあがつた女よ
恋を棄て給へ

操なご考へていず脂ぎり

サルトルを伏せて
女に
溶け込みぬ

抵抗のきかぬ媚態に
まばたいた

田光の射すを
男は見のがさす

ただ歩くだけの恋にも
春が来る

ネオンの下を
妬きつ妬かれつ
のし歩き

妖艶を
愛しつづけて息を引く

思はざり
臍が痴態の罪を被る

人前はあんな女と云つておき

愛人が雪の中の黒点となりぬ

もの思ふ女は鮎に手をつけず

色事に疲れ糸切草を見る

割箸を
割つてもらつて
やに下り

老らくの恋の濃度
のてれくさく

云い出したからには
女強しとも強し

金ですむ恋もさみしきもののうち

もう未練ないが糸屑とつてやり

別離^{わかれ}の言葉に深酒しなさんな

きつと来てくれと
仲居の年増なり

慰謝料の月賦と言うがおかしくて

未だ慾あり水晶の数珠

人妻と
あまりに近い膝となり

人妻のてかてか光る鼻の先

地でゆくか
舞台か
恋の成駒屋

薄情と云はれうなすく薄情さ

媚薬の如く
炬燵蒲団が
眼に迫る

恋の川田順
ほほえめばほほえむ

情痴の果てのひとり飯炊く

くちづけへお金はあした届けよう

椅子の背に
もう青春が
消えていた

秋
さ
ら
り
銀
の
襖
の
も
の
お
も
ひ

わかれたらとも思ひ
死んだらとも思ひ

幻の
黒髪となり
脚となり

首しめたまでは覚えてゐる嘆き

いだらしなさ
いつそ死なう
たれとしのか

あきらめていたと思ふに死を選び

人妻よ
不惑とはかなしくもあるかな

愚かにも
顔見にゆけば
雪になる

雨風が逢いた
いころつ
のらせる

名をすてて十七八の恋もせむ

愛

慈

俺に似よ
俺に似る
なと
子を思ひ

失職をしてから父の声でなし

子にやつた机で履歴かいている

晝の風呂
泳ぐ氣にさへ
なる父よ

子煩悩がつたんがつたんしてくらし

ある時は子をだんばしでくひとめる

木棉着でおごそかな父になりおほせ

何はなくとも
男の子等と冬を越し

さあみんな
降りてくれとお父さん

結界の中へうけとる子煩悩

父の腕前で
ボリーナスで
疑うな

箸紙を父おちついで書いてやる

ロンドンの一周忌に

お父さんはやはり
川柳々々云つてるよ

お前がいたらと思ひ出すと
煙草ばかり喫ふ

お父さんはネ覺束なくも生きてゐる

お父さんの神経衰弱がわかるかい

湯ざめするまで
お前と話そ
夢に来よ

わがままを
父特権と思ひ
す

俺の子といふのがあつておそろしく

風あがりきつて
親子が
口をきき

蚊張の中で泳いで見せるお父さん

子等の浴衣の
つんつるてんになれなれ

資本家であつたは
父の父の代

息子には替へられぬので
下女をさげ

父親に詰手の本を頼まれる

畑の中
父の姿の
ありがたし

けふの父は聞いてくれそうにも思へ

校長と意見の違ふ父をもち

く
び
き
り
に
ま
が
う
か
た
な
き
父
の
御
名

国の父に似ていて車掌きりそこね

父の死に
郊外の家見つけて来

父の死後莫迦にしている人に逢ひ

妻や待たむ
靴音を
高めんか

sofa が 欲 し と い ふ
妻 の
う ら わ か く

黒 髪 す き 下 す 妻 に
蟠 り も な し

来傘子
な の が
く 迎 出
な へ 来
り が て

靴下を
なげ出しぬ
今日の汗かな

六疊に
一ン日^あ
父としての愛

洗濯に
夫の匂ひ
なごも
せん

家賃だけ稼いで
女房気が強し

妬か
それ
のこ
れた
金ろ
もは
あた
り

失禮をするに
子持はなれて
いる

氣違ひじみた夫をまもり
老けてゐる

蒼空よ
すくすくのびる
子が五人

笑はぬ父に恩給がつき

減俸のはらいせ
女房なぐられる

かし家は聳ゆ
子のある方はおことはり

ひとりひとり
雑誌をあたへ
冬を越そ

店を休んで
母子健在を
書かされる

母と子の
蚤が
互ひに入れ
かわり

父の汗これで何人
食ふことぞ

障子張ることを
夫婦であひ
ゆづりあひ

万引で
進退伺ひ出す夫

苦勞が
程に
女房の
やせて
いす

てんて
こてん
てこ
妻の
櫛が
けを
見て
いる
雀

母乳の出る機械に
はなつている

髪結はぬことも
しまつの数に入れ

恪気から
洗濯物はつけたまま

母親は
日の落ちぬ
うち
行けといふ

慶應にいますと
家主子煩悩

人並に
女房も持った
子も持った

腕の見せごと
女房には談しとき

親の
ある
うち
はと
ふぐ
に
箸
つ
け
ず

まああがれ
女房の風呂は
長いから

嚴父慈母
子に見せられぬ本もある

子よ 妻よ
ばらばらになれば
浄土なり

妻の名の
電話も
いつか
無くなれ
り

父・植木・小鳥・娘はうちにいす

淋しさは
父の大きな
鼻とねる

鰻屋の娘
うなぎの顔に
似る

ちんぽを出す子よ
ママちゃんお留守なの

むつとしたが
子供も頭の
撫でておく

子供服
その親にして
贅沢さ

ハンモック
あいそに乗つて泣き出され

胃病の子
まま子のやうな
膳につき

貰ひ子の方が
藝者になるといふ

子　を　泳　が　せ　て
沖　の　景　色　は
眼　に　入　ら　ず

お ぎ
元 の
日 子
 も
 ぎ
 の
 子
 も
 息
 災
 で

風よ吹け
抱いてゐる子へ
歩く子へ

い つ し か に
母 と お ん な じ
美 顔 水

腰 が 碎 け た や う に
娘 の 舞 ひ 納 め

母の
子に
違ひ
ない
ア
ナ
キ
ス
ト
が

お茶漬を
蚊帳の中
から聞く
息子

A²
の
B²
の
と娘の
子

年頃
は
桜の
咲いた
様に
生き

一人子の

ごんな玩具も淋しくて

亡きロンドンを思ふ

みじかしといふか
ほんとに生きた子に

被^き人^ての
ない
帽子
が
あ
る
に
気
が
つ
ま
り

だ
す
入
り
の
一
つ
缺
け
て
も
が
た
が
た
し

学校の横に住みて

子を死なし

学校に

子の多いこと

おほきな事実
子が死んでゐる

まだ弟があるやうにいふ
悔み聞き

ロンドンを懷ふ

三周忌
今はつかはぬ硯石

二男アト危篤

汝の父は
ロツク氏液をささげ立つ

子が病んで
店をしめる
のかと問は
れ

數 醫者といふて居るとは
子 から聞き

金 持をにくむ思想を
息 子持ち

一 周忌その弟を泳がさす

ごもの児に
みんな云はさぬ
親心

子 沢 山
子 に 使 は れ る
年 に な り

首 っ り は
子 を 活 動 へ や つ て お き

すべりんこ
親は
涼しいところで待ち

胃病の子
絵本ばかりをあてがはれ

大男を
母は
この子に
してしまひ

朝陽の令閨を悼む

子のことで

最後の唇^{くち}が
動きしか

一心寺にて

父を求め
子を求めたり
骨仏

母親は
人出を聞いた
ただけでやめ

ヨロヨロで待つ
その親々の
立話

息子といふ名で
五十に手がとどき

父として
エスカレーターの
先に立ち

一銭の瓦斯もうれしい
父と子よ

子沢山
僕の枕は
何処へ
いた

母の事思はぬにあらず
泊つて来

婦朝して
子の寄りつかぬのも
さみし

膳に左して子の頭子の頭

思はざりき
娘が二十四に
もなり

その母も
丸刈にして
待てといふ

父の名を
呼びすてに
するまひ
ごの子

父ひとり
インフレを
おそれてあ
りけり

又辭職です
かと
妻子驚かず

慰問文
子は鶏の数も書き

死にともなかつたやろ
娘のままで置き

長男の顔と弟の顔と似る

不肖の子へ
儲けたことは隠しとき

お互ひの
女房の話
だけは避
け

この村も
非農家の
子に
写生され

やけくそでうんでるやうな
子沢山

ネクタイが
一本ぎりの父となり

落第か
そうかと
親は云つたきり

蚊の中で
父は
漢書を手放さず

俺の妻にしては
少々
みすぼらし

女房に
安請合をおそれられ

妻だけがまつる
神様仏様

ママとなり
スターのサイン
どこでなし

稼ぐ母
ストで休
ろごばれ
んで

ま
ま
母
の
き
げ
ん
元
日
か
ら
そ
こ
ね

妻 ス
に ト
あ リ
な ツ
ご パ
ら ー
れ にな
る
わ
と

社 P
交 T
と A
思 に
う 出
母 る
を

あいの子は
もうネキタイを
させられる

父の咳節しまつ約まつをせよと云う如し

花見にやりましたと
亭主手習

剃 双 の
す る ざ も あ り
子 を 愛 し

も う 畑 自 分 の 夫 ば か り な り

仏飯へだけとはと
母の心遣り

ごの兵も
後姿の父に似て

よ　う　降　り　ま　ん　な　あ　と
老　妻　に
ね　ぎ　ら　わ　れ

名ばかりの夫婦と知らぬ
公益社

又せんじ薬を
妻に
嚙まされる

不死鳥

水の垢

さうださうだ
故人はまさくし立てる癖

拘られたを
苦笑です
地位にゐる

ひげを剃る暇のないのも
無事のうち

思案する膳に
目刺が置かれたり

安産に
宿直をせぬこと久し

祝電へ四角張るだけ四角ばり

洋室へ
松竹梅を持ちこまれ

君僕といふてゐられぬ大三十日

十二月自分のうちへよりつかず

嫁にやつた
娘は娘で困る
大三十日

伊達巻の汚れ
年子が二三
人

誘惑を
ひそかに
待つも
松の内

日は東西の年にて候か

今立つた人の盃うさされ

連れ出すに
應援のある
三ヶ日

十日戎
両手でうける
気で出かけ

無くなるかも知つても
さらの傘を貸し

合住居
米がごちらもきれてゐる

仏壇は凡夫の拜む色でぬり

新嫁のやけは
樽を
なげ
る
だ
け

必要なことしか言はぬ
国訛り

送り人のない出帆は
雲を見る

金拾ろた夢ぶぶ漬けで聴く

北風へ
これだけ
帰る気の
売れば

逢状の
あとしばらくは
楽書し

行くだけの旅費しか持たぬ腕をもち

石 鹼を忘れ
看護婦とりに来す

爪弾の主に身受の金がなく

腰が立てばまだ富田屋の一の客

妻に
中将湯をのめのめといふ寒さ

よきこともあるまじ
妾流れゆけり

料理本なごよむ妾なりしが
秋か

向ひの貸家きづけり
靴穿きながら

四十では女もあとへ
ひかぬなり

よく怒るようになったに
フト気づき

二号を持つて子に意見せず

正月も

三日の客は鋤^ナ焼^キにされ

少し貸せと
大学教授如才なし

情報
天皇に
達せす
焼け出
され

書置もなく
料理人河豚で死に

斜陽族
墓地の引趣しにも困り

公報を
まだ信じない
信じない

附録だけでエエと
編輯侮辱され

主婦としての投書を書いて胸にはせ

菊植えていても
社長は
俗に生き

病院の廊下
財布のまゝ渡し

すしだけで
あんなにしやべる
妻の客

組見の中の一人在
嫁き遅れ

愛情のしるしの名古屋帯をしめ

故郷では
ただ物質で評価され

流れ作業
晩のおかずを思いつつ

よいとこへ来た
と見積までさされ

うすぐもり
誰か来そう
で来ぬ日なり

火の見櫓
この
春の空
これが職務か

立ち廻りの稽古も
めしの種のうち

一ト幕見
みそめたとこで
放り出され

水車小屋ここから隣り村になり

苦の世界
めし一椀をめぐまれし

会話科に
家出して来たのもまじり

遺 遺
髮 骨
が が
戻 ゑ
り り

女またお皿の上に眼を伏せた

諸な
敬遠
さん
かれ
はじ
め
かな
ごと

手の染まりそうなすびの紫よ

他殺やろうと
云い云い
たばこすいつけた

三本松にて

脱穀機ドドドドツと
日が落ちる

麦の秋
畠守の農家の
時計鳴る

俗曲へ六十の父脂ぎり

必要以上に
米をほしがる世帯持ち

夕桜
名もない橋を
渡つて来

さて金となると
友達甲斐もなく

薄情がごうしたのよと
流行ッ児

つれないと云うのを
はんぶ聞いて出る

忘れてくれと
社長は
金ですむつもり

薄情な男
眼鏡を
拭くばかり

商売は別さと
きつちり払はされ

君とこも
寝正月か
とみくび
られ

未亡人けふも涙の浪費して

握らせりや握る社党の
浅間しさ

誰の墓だか
赤い蜻蛉が
飛んで来たか

黄菊白菊
明治の匂ひなつかしむ

せつかちの彼氏
学者の列にゐる

世話好きが
写真屋までも
よこすなり

けろりかんとして
代議士嘘が云え

同窓もあちらは芦屋に住む身分

停電の中へ
ガタビシ父帰る

病院はまだ迷彩のままで立ち

軒先に下駄にもならぬ
桐がのび

新築新築
負けた国とも思はれず

次の間でもう葬式の予算立て

贅沢は
百姓紺の匂ひさせ

農村の時計は
重く重く
鳴り

附き合ひで
一尾^{びき}釣つただけのこと

ヤミ出来ぬ亭主は
今日も毒づかれ

人参や牛蒡を恩に被せて呉れ

使元のバ
はのラ
れ主ツ
る人ク
がへ

ジリ貧に今更家の広いこと

焼諸で晝をすました
顔もせず

ふるさとは
蝗
右から左から

売食ひが
今日は
歌舞伎へ行つたそな

踊の輪
月は
遙に忘れられ

疎開の子繩の帶するまでに慣れ

供出を知らず
蝗が
飛び違ふ

シヤツよりも肉
肉よりも米のこと

逐鹿陣營より

志士として花の散るのも知らぬ也

落選へ
はや葉桜の候となり

ア　春
メ　も
リ　や
カ　や
ナ
イ
ズ
し
て
迎
え

泥繩の英語なりけり
署長以下

御降下の姓に
名刺も新らしく

ふるさとの
名士を訪へば
炭を焼き

一万や二万
長屋の端で食ひ

餓死線へ
まだ一丁はあるならん

だがしかしなごと
天皇制を護持

闇市の面子なごは
遠うに捨て

配給をさへも流して
生きんとす

背の高さまでも
負けてることを
知り

白米の
弁当へ
多いこと
の

学驚へ父まだ若く母強し

お見外れをされて
戦鬪帽を脱ぎ

起重機の如く
佇くたのもしさ

兼務兼務
東條さんへ
続く気か

翻へる
袖はなくとも美しし

朗らかさ柔道着ほど
つづくつて

牛老ひて
家族のやうに
いたはられ

諦めてもらつた夫ですと云ふ

腕白が
そうか
やつた
か
体当り

看護婦となつて
仏印だよりかく

泰に
いる
そう
なと
稲の
草を
とり

軍
属
の
自
信
講
道
館
五
段

伊無条件降伏

哀史一篇
南欧に陽は沈む

全印度よ立ちあがれ

お膳が出たのに
印度が
まだ来ない

衣料切符持つてゐるだけで
気が強し

戦術にしては
断食
すねたよう

祖国ありのみ
旋盤工となり

許嫁
鉤ぐらゐは
つけてくれ

をかしさはあいつが
孫の話する

ベ
ン
チ
ャ
ラ
を
電
話
で
ま
で
も
ま
く
し
た
て

敵前上陸 僕はふじみにて候

見はらしを
もう外人に奪はれて

魔 都 ソ
の 会 ア
如 の ラ
く 屋 ー
根 機
が

さすが銃後
桜は咲いた
ただけです
み

をかしさは
鯨の靴に豚
の靴

近衛内閣総辭職

磨一步退き

小手をかざしたり

あ あ ほんに
ほんにとあ
ほぐ
後の月

外科を見舞ひ
代筆たのまれ
る

聖書一冊
菊一輪の二階也

千人針
胡瓜抱へた
手でも縫ひ

玉出駄踏切にて

日ぐるまも
兵を見送る如く也

とろろ昆布
しほこぶ
闘志衰へず

包紙に
鰻
図案化されている

拾ひ屋のすがたも霞む
窓にいる

選挙違反
あの料理屋の灯を思ひ

赤心一票やりどころなし

同情の最後の品に
米俵

外国の例で
市長は切抜ける

人妻になつて
卑怯な
眼を使ひ

二人して読むは
祝ひの手紙なり

二階のに
聞かされて
河豚の味
いる

台風へ
念仏も出ぬ
あわてやう

燈下管制
そこへ大きな月が出た

妾ともつかず一年世話になり

職人同志
脚気の足を見せ合うて

蓑盆
変哲もなくモ翁坐し

寢台を辞して
眉山に樂しめり

涼しさは何処の末寺か
峰に立ち

おばアさんの部屋で
鉄の音がする

掛軸が素直に垂れて寒いこと

米の値も知らず
ヒューマンイズム
称え

香港は
手足の
もげた
蟹に似
る

水兵に太平洋はうちの海

時局私観

気兼ねしては
打水さへ出来ず

おツさんも
翼賛かいと風呂で会ひ

英語排撃を笑ふ

スキツチをどういひませう
新世帯

日本髪
悠然とし
て脊が低し

哲 莫 莫
学 迦 迦
も だ は
か が
じ
り

苦学した博士はすぐに金のこと

還暦もいいが
家賃をまだ払ひ

時鳥から
俗物と見くびられ

葱 赤燕 奥様の短歌

女社長
うつつかり
云つちまひ
僕と

二月の寒さ
土左衛門と巡査

残置燈
女給鮎のやうに消え

我々が今食ふ米へ
閣議也

全快だ
だが
十一貫と何百目

ア　ア
ハ　ル
ハ　ミ
と　ニ
戎　ユ
さ　ー
ん　ム
笑　か
ひ

買溜めに
嫁の里ま
で手を廻
はし

色気ぬきを

女将^{おかみ}

へうぼうしてかかり

意気張で

貞女となつたまでのこと

戯れに捕へた蟹もホテルまで

返事だけしといて
雲をまだ見て居

俄雨
ジョッキ
一つで
待つ
つもり

君・君・憂鬱を配つてあるくのは
止せよ

ごつちつかすの返事したのを
悔ひはじめ

売上の
これっ
笑つて
しまし
うかし
に

糶売屋

そんならといふ
シャツを出し

名古屋
二 号 になつて久しけれ

藤の棚
女中は親に会ふところ

尊くも
げすにも見せる
乳房にて

食ふための仕事と見えす玉突屋

婦人記者
こと面倒になると辞め

人の声に
初手は内職持つて逃げ

内職で
お米屋だけ
は
帰らせる

新らしい後家は
ぶべつのなら
立ち

つりの多いことに気付いた
歩きぶり

泊り客
雨で
枕をあてがはれ

人形になつてゐろとは
嫁へ無理

いひすぎた日は
庭も掃き水も打ち

俺はもうあかんと
きめてかかるなり

資本家のための筆とはなり終り

うれしさに
盲は一つ踏みはづし

苦樂園
仲居同士で
髪を結ひ

靴下を投げ出し
誰も来なんだか

襦衣一枚
出来ぬらしを
続けて来

慰めて
やうやう箸を取らすなり

噓にしておけと
障子をびしやり閉め

月末の
金さへ渡しや
出てあるき

これだけを持つて帰れと
云はれて居

稼がねばなごと
三十七八九

近道にされてる敷地
売りに出し

すすめられ
女
毛布の端に乗り

もういらぬやうに
釣瓶は投げおろし

落籍されて
心にもない字の稽古

兄らしいところは
年回知らして来

古い値をいふて年寄値切るなり

今見れば
これつば
かしの畑
にて

仰山に鱗を飛ばす誕生日

下宿したころは
屋根からよく訪ね

大 阪 へ 来 て
屋 根 ば か り
見 て ゐ ま す

借金があるとは見へぬ
石畳

これ位にしとけと思ふ居候

金ためて
ごうする
気かと
椽の端

借りる気で行けば
有馬の夏と聞く

電車賃もないとは無心哀れなり

不孝者
喜劇役者とまではなり

許嫁
あめりか
後家を
たてとほし

人形を送れと
支那の租界から

心 得 て
仲 居 は
梅 の 枝
を 折 り

引止めて
新茶をいれるくらしむき

羊羹のすこしかたいも
旧家らし

けむだしの掃除に
春の目をつぶし

雑兵に拜まれにけり
選挙権

かたつむりやうやう峠越したとこ

資本家は
寝衣のままで
逢ふてやり

すき焼と見えて
船頭葱をさげ

叱らずにすませたことを
恩にきせ

ひるひな
かあるばかり

古本を売つて
二階の暇乞ひ

書置の一ツは
テロの兄へ宛て

奢られて
荷物を
いつか持たされる

踊子へ
雲でも
降りて来
そうなり

胸の痛みを知らさじと
箸を持つ

学校の
倫理で
死ねと
行けば
ころ

歩をついたままで待たせる小商ひ

番傘に残る
先祖の何右衛門

死所として
京の
格子の中にある

アダム・スミスを振り棄て
力強く生き

よく来たと
小さな机片づける

とりまきを
いっそ淋しいものに見る

新町与太呂にて

河豚だ
酒だ
男ざかりのうれしけれ

女十八アダリンの夢

恋の　ない
人　に　う
皿　の　れ
数　の　し
　　い

十二月
うれしい風も
少し吹け

奥さんの鼻には困る
美粧院

当選にバツタの姿思へかし

自 分 の 好 き な
心 配 を 持 つ
若 き 日 よ

人前は
家賃位と云うて置き

砂ぼこり
売れない品を
裏返す

青春を掴みそこねた金遣ひ

米の値に
換算すれば
おじけづき

古本屋でもやりますと
帰りゆく

豆香水
もう妹も女なる

新町にて

生きとし
生けるものの中に
妓あり

文学を軽んじ馬で裾野ゆく

スタートを切るころ
既に金持さ

畫寢から
海岸線がのびてゆく

絹夜具の中で
減俸案生れ

代表の顔三角に見えるなり

副業を尻眼に
奥へ通るなり

定食に
手術の道具は
ごならべ

スピッチを
考へながら
テキを切り

チ
ウ
リ
ツ
ビ
鍵を預る人
に
咲く

失望が
大きすぎたか
やつて来ず

悪友を
姉がさへぎる寒さなり

霜やけて
それから年をよく聞かれ

夢を見てゐるうち
家賃滞り

整理 頻々

ワイシャツの汗も悲しい
鹹^く首^びだつた

懸取を
押し流す
降れよかし
ほど

寒がりがつまみ出してゐる
黒の石

訃を聞いて
炬燵の人
も手を合はし

寶石にもう感覚もにぶりゐる

裸婦を押さえる
鋌の輝き

握らせることを忘れぬ
苦勞人

素つぱだか
わが亭主にして
みたし

いのちがけで
貰つた妻の
虚栄心

朝顔の家で
牛乳ことわられ

山の
上
二人
しや
がめ
ば
絵に
され
る

乾イ
ズム
先ず
情熱
を棄
てな
さい

桜は白け主婦は老ひたり

とは云ふものの
金に
頭を下げた人

先方の間違ひだが
女房を叱つとき

もう泣かぬことを
手紙の端に書き

間違つて
お世辞を云へば
キョトンとし

このごろは
あつちにある
と
大きく出

手を貸せば人間並な口を利く

学校とは違ひ
会社のうすぐらさ

春の雲
あはた
だし
きは
獸人に

供託に質置く人を
たのまんなや

黒い鞆へ托す運命

い 現
い 在
た の
い 彼
事 は
を
云
ひ

出は出たが
一人はさびし
松の内

世の中を
巡査になつてもあまし

蛙 空
の は
平 晴
泳 れ
ぎ た
り

柿 原 銃^つ
の 始^{さき} の
色 を
見
た
り

大男
一丁先をまだ歩き

面当ての寄附とも見える
金の嵩

泣きごとは止せ止せ
どうせ十二月

お金を預つてやらうと
せめられる

肺であること
なせ隠したりするんです

僕は
医者でも薬すべ
でもありません

鼻の偉大さ
山脈を思はされ

障子さへ
聞きつらい程
叱つて居

言訳も
指環をいち
りいち
りする

素麺に
お祖父さん
まだ坐はり
丈け

定食の
こんなもの
まで数に
入れ

羊羹のこともめてる老夫婦

夜店出し
余所の時計で去ぬ仕度

三代も仕え番頭露次に住み

不渡りは
たつた三桁に足らぬ
金

使ひきれない後家の収入

観賞のばらも植え
経済的なすも植え

大男
母を
船に
乗せ
軽々

人妻の
襷を外
すその
早さ

尺八をすてて
自炊にかかるなり

椅子ばかり残して
みんな寝てしまひ

庭 仲 そ
を 居 の
向 の 座
き 方 敷
が

奥さん
の花が
自慢の
サツと
こけ

屋根に
出て
膝頭抱
く閑が
あり

一皿は
氣違ひ
顔で食ひ
じみた

売文社を興して

風すこしあれど船出の四十一

一平へ
ふせうぶせうに
顔を見せ

貧しさのながながしくも
四十一

支那炭をつぎつぎ
南画出来上り

大金にこつちの事は聞いてゐず

いふまでもなく
合服も月賦なり

マーケット
女房の財布
借りて買ひ

考があつてのことと
かろくうけ

職人へ
寝たよ寝たよと
取り合はず

借金でくれた見舞と
つゆ知らず

風つひに
黒点となる
うれしさよ

雲助の戻りは
月を見て帰へり

道眞を訪へば
只今お手習ひ

日本いき
箸の持ち方まで習ひ

戸張孤雁氏逝く

裸女の線にも
悲しみのただよへり

寄贈品
し
み
が
あ
る
と
も
云
へ
ぬ
也

女房に
負けまいと
する
愚かしさ

その乞食
歳のわからぬ
ご汚れ

自嘲

入齒の金を
おごらされた
たおかしさ

イイをしてご覧と
齒医者眞面目也

道ばかり今日はきかれる
焼芋屋

繪馬堂の
一文菓子に世辭もなし

党のため
海軍になつた
おそろしさ

俺は彼を莫迦にしてやろう

濁水再び妻を迎へるときき

後添が来て
明けたてを
軽くする

先代は
自分でせねば
気がすまず

意見した方も
夜長に困るなり

死
ぬ
氣
で
出
た
に
松
竹
に
居
る

賽錢の方へ
神様
気をとられ

エプロンをかけると
手紙ばかりかき

村長を訪へば
植木の虫を取り

不景氣がさせた
きみじかとも思ひ

柳行李はや大阪へつきにけり

人の下駄
そろへる事
に
いつか馴
れ

人質のやうにとられる夏羽織

うざくかと
聞き聞き
シャツを脱いでゐる

儲けてるうちは冗談ばかりいひ

袖口で押し戻したり五円札

世の苦労
みな引うけた
気でくらし

日 一 日
下 情 に 通
そ し ら れ
る じ

花道の新派は
客と間違へる

本堂で
和尚
和尚の
声になり

行末を案じるように
鶴は立ち

鶏を追へば
踏切越して逃げ

先妻は
風邪をひかさぬ様
頼み

本堂の賽銭いらぬもののやう

昇降機
扇子の
女なりの
風は

ナフキンを
小さく畳む女客

本堂を降りると
嫁の傘が待ち

大根を
きざんで
料理とは名づけ

解決を
支那料理
までもつてゆき

あのダイヤ
もう藝人の
指になし

伝票の裏へ
皿数聞いてゐる

藝者決して
百姓の子と云はず

日 永 には
亀 も ほと
困 つ て 居
ほ と

女の笑ひごえ
幾つもかさなりあひぬ

殺すことにきめて
其の夜は
寝たりけり

童貞が弱蟲といふ名を貰ひ

寒さは寒し
炭斗の新らしさ

誰が捨てた
草鞋か
氷張りつめる

箱 乗りも
おんなじやうに
眠くなり

名人は
顔をあげず
に
返辞する

親切をおしつけた事さへも悔ひ

近頃のこと
は知らないがねと
意見

襦衣一枚で書いた
労働運動史

代診はバットをさして立ち上り

川柳の愛護者上総天香先生
池田室町の自邸に永眠せらる

夕刊の漫筆皺になつたまま

盜 塁 へ
夕 日 は 既 に 落 ち て ゐ る

今 日 中 に
着 い た ら よ い と
牛 思 ひ

本店は碁盤が据えてあるばかり

門弟の出たと思へば
もう打たれ

活劇のやうにも見える
水上署

相談をして
洋服を着る
養子

浜辺まで
見にやらされる
許嫁

軒店へ
昨日やけふの客でなし

い
つ
づ
け
の
も
う
刺
身
で
も
な
か
り
け
り

新店は
それ
も
すぐ
来る
やう
に
云
ひ

品切れに
その
まま
そこ
へ
話
し
込
み

本店が
椅子に
なるの
も
近い
うち

いのちさへあればと思ふのみ
仲居

居候が
今は
高座に生きてゐる

馬鹿な話だ
傘一本を持ち廻り

醜男の哀れ使はれ損になり

弟の厄介ですと吸入器

六三六

板の間に寝たが
この頃金を貸し

戯曲に
生きんとすと云ひぬ
ソーダ水

このごろの疲れ
さんでりやは重し

誘うても呉れぬほど
髭のびてゐる

気樂さは
枕をさげて
出迎へる

形見分で
下女孕ませた事が知れ

浜へ出りや
隣りの
メリーさんも出る

かなもけりも
作れず
虫の聲ばかり

広告塔
一ト雨降つた中に立ち

蟲なくを
哀れくとも見す
妾住む

品切れで
向ひへ這入るところが見え

孝行はいいが
男がしなびて来

雇はれてゐれば
叱られ初めもあり

犬洗ふことも仕事の
浜の家

光明のなかにひたつて
餅をやき

大正天皇を悼み奉る

草葬の臣かなしみの炭をつぐ

古着屋は
ちよいとつまんで
ちよいと放り

うなされるのもありさうな
古着店

青いソフト
東京の夢
巴里の夢

論文の喧嘩は
いつか年を越し

宴会がすむと
雇仲居は
女房じみ

嘘ばかり言ふ
亭主とは思ふてす

哀れ哀れ税に苦しむ役者とか

はらませるだけは
はらます
親がかり

あ
ん
た
の
や
う
に
い
ふ
て
も
と
返
辞
せ
ず

前書のある句

天皇を迎えて

おなじみの

帽子を

今日も手にされて

お 気 の 毒
あ れ あ れ
帽 子 振 り た ま う

オ ー プ ン へ 迫 ま る は
初 夏 の 民 の 呼^い吸^き

天皇へ
雨も
埃りのたたぬほど

未亡人として
天皇へ涙ぐみ

天皇も
人氣といふを
御覧

妃殿下に
出てほしかつた
受話機持ち

天皇へ
民のかまごが
停電し

大阪も海が見へます
ほのぼのと

悼青明

浴衣掛
一寸いてくる旅なりし

桃哉を悼む

かなしくも
池田は雲の青々と

長崎柳秀博士の渡欧に

東洋の皮肉をもつてかしまだち

鮎美君の新婚を祝して

ふたりふたり
人ごみのなかでもふたり

葉平君一女を挙ぐ

眼も涼しかろ
鼻もたかかろ
女の子

其象を悼む

行き先も
知らさず
句帳のみ残し

蘆村を懷ふ

その子等は
一に一足すこと
知らず

新らしき職に就く

味は知らねごとりあげる箸

楢重を悼む

裸婦かたづけてあるじ弔ふ

六〇号病室の人となりて

病臥しているに電話の印鑑の

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ

平二とこそは

書かれたり

佐渡支庁長に栄転された利生君に

栄転のうれしき四十五里となり

首相逝く

待つたなしの
歩にさされたる
犬養毅

悼五葉

藥湯の隅にひとりの君なりし

新郎新婦に捧ぐ

よしや道は遠くともふたり

知らぬまに
靴が
みがけてあるもよし

柳秀・長崎博士に

停年は七曜表に用もなし

筑川・布施博士医学使節として訪独

往診にしてはナチスの遙なる

洗塵・石崎博士北市民病院長に栄転

喜びの電話院長室へ継ぎ

近衛公に大命降下

おもむろに
笏でまねいた組閣なり

第二次内閣誕生

近衛さん

背負ひ直した重さ也

村田省藏氏の鉄・通大臣に就任を祝して

その船出
けむりも見えず雲もなし

村田さん
大きな銅鑼を聞く日也

小林一三氏商相就任

引継ぎの
少し会社
が大き過ぎ

風見章氏に贈る

頼むよと司法大臣磊落だ

西園寺公を悼む

折も折大番頭に亡くなられ

園公のことよ
興津の鯛の鯛

丹路居

新築へもうスリツパは
春の音

在外の同胞に

箸の国
刺身の国を
忘るるな

越舟大人を悼む

三七日へ ああ松風の音すなり

芳一氏逝く

官舎の灯

今はむなしく

またたくか

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子

勅題

寝転ぶ癖の
僕に
海上雲遠し

北みきを君応召

君も征くか
足もとから鳥が立つように

愛子を喪へる高尾兄に

君の子が書けば羅馬字砂手本

片山首相に捧ぐ

さあ

動きますと

片山運転手

淀通信病院藥局長に榮転の沒食子君に

又飲みにゆくよと

君を送るなり

生々庵母堂を偲ぶ

一周忌雲をとうしてなつかしむ

旅つれづれ

山中温泉にて

だしぬけに
鐘の鳴るのも
旅のこと

綠丸にて別府に向ふ

船を忘れるほど人妻の帯赤く

人の世の船も別府へまではつき

旅愁

遠く来てあらしの窓に子を思ひ

宿の二階今来た船の腹を見せ

朝霧の中を出て来た旅の人

一人旅流れるように立つてゆく

亀の井にて

みち足れる人へあふれる別府の湯

大和飛鳥にて

あすか川これかと思ふ川の幅

久方のその香久山の小さすぎ

むかしむかし明日香にちりし桜散る

南紀田辺

田辺節二燈一線で船がつき

五明樓まだ揺れている気で泊まり

宝塚

旧温泉指さすだけで引きかへし

長谷寺

一匣べつたり白粉やけをしまさずや

玄賓庵

無造作に脱げば玄賓瘦せてゐる

吉野山にて

吉野山散るてふことを教へられ

吉野皇居址

舞台人なし桜が散るばかり

勝手神社にて

心ここにあらず 静は舞ひおさめ

吉水院

色々威落人に派手すぎて

生々莊(山中湖畔)

襲ね着で聴くはうぐひすほととぎす

道後

丹前は坊ちゃん団子のぞきこみ

堺水族館

水旅館に雀鮨にもされず生き

水旅館おこせと鼻をつき合はせ

大安寺

二十六羽描かねばただの居候

仁徳陵

謹んで拜せば御陵ただ蒼し

巖 島

清盛へ何か云ひたい島へつき

干潮の鳥居は棄てた気味があり

寝虫庵に芭蕉を偲ぶ

みのむしの何代目かがぶらさがり

月ヶ瀬

一寸来て月ヶ瀬風邪をひくところ

奈良にて

奈良の宿ドカドカと靴を脱ぎ

神鹿

鹿おもへらくなるほご刀掛け

せんべいの薄くなつたを鹿も知り

宮様と知れる鹿寄せ見て帰り

正倉院

さう聞けば国宝らしい光りやう

お百度も足取早い二月堂

案内人聞いているのかとも云へず

ゆびさすは三笠若草奈良ホテル

松花堂へ ああ江戸の水 京の水

見てくれといふは礎石の興福寺

虫すだくままに極楽院は荒れ

猿沢の池

学童へ水が三分に魚七分

十八間戸秘めたる恋もありつらん

まんなをし地藏

七転び八起きを祈るまんなをし

般若寺

その額も嵯峨天皇で知られたり

東大寺

奈良二郎つかい果した人も聴き

奈良の奥山

寢仏を歩け歩けが通り過ぎ

寢仏のこれも一つの生きる道

信心で来たのへ桜眞つ盛り

花見茶屋毛布はおなじやうにはげ

菖蒲池遊園地にて

夕桜とんぼがへりがしてみたし

東京

時雨れてる銀座に亀屋鶴五郎

四条にて

京の夏河原を一寸歩かされ

雨の松本にて

遠く来て

信濃に

山のない日なり

水郷大洲

この鮎は 藤樹先生の喰べた鮎

大和三本松村の山莊にて

名も知らぬ
山の起伏をうれしがり

翠光居を訪ねて

この村の
詩人が炭を
焼くけむり

路郎句集「旅人」索引

ABC順

旅人

あの子へ……………	(六〇)	太つたを……………	(六九)	日あたりの……………	(一九)
あの子……………	(一七)	凡聖一如……………	(九七)	古くとも……………	(一三四)
悪運つきず……………	(三三)	ビルの窓……………	(九九)	筆不精……………	(一三五)
青空に……………	(三六)	朝鮮の……………	(四三)	腐肉とは……………	(一五〇)
遊ばしも……………	(六八)	陳情に……………	(二五)	元日の……………	(六五)
あの記事も……………	(七三)	中風……………	(一三)	軍服で……………	(六六)
あの日向……………	(八六)	貯金帳……………	(一六七)	後家の相談……………	(七八)
あの博士……………	(一三〇)	大臣に……………	(五)	元日も……………	(九八)
あんとと……………	(一四)	出鱈目に……………	(一五八)	銀行の……………	(一四四)
ああ僕も……………	(一五四)	煙突の……………	(九五)	玉碎す……………	(二一八)
あんたに……………	(一五)	エキストラ……………	(一四)	元旦だ……………	(一六四)
暴力はよし……………	(三五)	駄を出た……………	(一六)	銀行と……………	(一六七)
弁護士も……………	(五九)	戒橋……………	(一六六)	ひとり立てば……………	(九)
豚の子へ……………	(六〇)	冬は尖つて……………	(二〇)	歯が痛い……………	(一四)

独り身へ……………	(二八)	保険金……………	(一三三)	重役も……………	(四)
人妻の……………	(五)	居候も……………	(七)	地震から……………	(一四七)
一口も……………	(五)	祈つた甲斐も……………	(二)	人類は……………	(一五三)
春のすえ……………	(六)	いつまでも……………	(三七)	紙屑を……………	(五)
ひとりゐれば……………	(八一)	医者が死を……………	(四)	今日も店に……………	(九)
裸の外に……………	(八五)	一生は……………	(五八)	くびきりへ……………	(一一)
春の僕……………	(九三)	一ンち違ひで……………	(六一)	食ふべくも……………	(一六)
春の日は……………	(一〇三)	家へ帰れば……………	(七八)	金は無くとも……………	(二四)
本復を……………	(一〇三)	色仕掛……………	(九四)	機械の一部……………	(二八)
春寒し……………	(一〇五)	一票が……………	(一二)	機械化の……………	(三三)
鯉へる……………	(一〇六)	院長を……………	(一四八)	急所とは……………	(三九)
春の艸……………	(一〇九)	いつからか……………	(一五)	会社では……………	(三九)
一ト握り……………	(一一)	いつのほど……………	(一六五)	混雑の中で……………	(四五)
人柄が……………	(一二三)	弱点を……………	(三八)	聞いてゐれば……………	(四六)
芳紀まさに……………	(二六)	女中の子……………	(四〇)	心にも……………	(五〇)
ハガキすら……………	(一三)	十二月……………	(四八)	蝙蝠よ……………	(五三)

君・君……………	(五七)	門出の日……………	(一三五)	妾となつて……………	(二七)
会社が……………	(五八)	くすぐつたいよ……………	(一二九)	もう僕も……………	(五三)
君見たまへ……………	(四四)	君止せよ……………	(一三七)	もしひよつと……………	(五三)
駈落に……………	(七〇)	瓦の飛んだ……………	(一三九)	幻の……………	(五七)
これ以上……………	(七六)	彼の一生……………	(一四〇)	まだ噓が……………	(六五)
腰のひくい……………	(八八)	胸像も……………	(一四四)	もう世辭を……………	(七三)
肩書が……………	(八九)	金持だ……………	(一四八)	貧しさに……………	(七三)
小新聞の……………	(九〇)	帰れとは……………	(一五二)	身代りの……………	(一〇五)
気の弱い……………	(九二)	鯉節に……………	(一五七)	巻脚絆……………	(一六)
誠になつた……………	(九三)	壁に塗り……………	(一五九)	無力の男……………	(一三八)
子が死んで……………	(一〇三)	去年の子……………	(一五九)	水溜り……………	(一六二)
この腕を……………	(一〇四)	見渡すと……………	(一三)	二階を降りて……………	(二)
くびをつれ……………	(一〇八)	無常とや……………	(一〇)	寢転べば……………	(一三)
幸福の……………	(一一)	もう叱る……………	(一三)	人間に……………	(二五)
草の根よ……………	(一二)	まけて呉れる……………	(一四)	にぎりやの……………	(四三)
買出しと……………	(一二)	滅私奉公……………	(一六)	苦々し……………	(四七)

長靴が……………	(六〇)	夫より……………	(四九)	臨月へ……………	(二三)
二階のへ……………	(七一)	おしやべりの…	(四九)	良心が……………	(二八)
人間の……………	(七五)	大きなものに…	(六一)	ラヂオ又……………	(一九)
なすびも……………	(八三)	大杉を……………	(六三)	六十一……………	(二六)
仲直り……………	(一四五)	お見舞と……………	(七二)	料理屋を……………	(一四一)
ぬけさくの……………	(八七)	落人の……………	(一〇八)	考人の日に……………	(一四九)
往来で……………	(四)	お互ひに……………	(一四四)	労基法……………	(一五三)
お元日……………	(六)	お婆さんに……………	(一四三)	老人の日の……………	(一六五)
往診の……………	(七)	お女将と……………	(一五五)	その日ぐらしも…	(一八)
奥様一人……………	(一〇)	親船を……………	(一五七)	証文は……………	(二二)
お互ひの……………	(一二)	男ばかりで……………	(一六〇)	それが世の……………	(二三)
お前達は……………	(一五)	P.T.A……………	(二〇)	寒うおまんナア…	(二五)
女の……………	(二六)	パチンコの……………	(五六)	資本家は……………	(二七)
おしやべりは……………	(三〇)	ばん／＼の……………	(二〇)	神経衰弱の……………	(二九)
おべつかが……………	(三四)	老人は……………	(三八)	車庫の裏から……………	(三三)
お互ひが……………	(四四)	煉瓦の下の……………	(一〇七)	職責で……………	(四一)

その嘘に……………	(四三)	搾取されて……………	(二三)	撞球 ^{たま} よころべ……………	(二六)
書斎はいいが……………	(四四)	三合に……………	(二三)	他人らしく……………	(三〇)
失明に……………	(四六)	失礼々々……………	(一九)	つまり胃が……………	(三三)
死は強し……………	(五〇)	鐘樓に……………	(一九)	てにをは……………	(三四)
サンシーも……………	(五九)	斜陽族……………	(四二)	てつちりへ……………	(三六)
千田が……………	(六八)	正月も……………	(四二)	追放を……………	(五三)
出世など……………	(七七)	死んだそうな……………	(四五)	疊も匂い……………	(五四)
生活を……………	(七九)	吹殻で……………	(五〇)	只一句……………	(六三)
収入の……………	(八三)	しらじらしき……………	(六一)	時計にまで……………	(六六)
そろばんの……………	(八四)	涼み船……………	(六三)	天才へ……………	(六七)
しづかさは……………	(九二)	涼むのかと……………	(六三)	天井へ……………	(六八)
総辞職犬も……………	(一〇〇)	天井に……………	(三)	店子店子と……………	(八八)
総辞職再び……………	(一〇〇)	戯れに死ねれば……………	(八)	天才か……………	(八七)
西部戦線……………	(一〇一)	鯛焼けは……………	(一一)	時計が……………	(九六)
櫻かねと……………	(一〇七)	戯れにいつでも……………	(一九)	友達に……………	(九八)
失恋が……………	(一二四)	鯛一疋で……………	(三)	突撃で……………	(一〇〇)

トランクは……………	(一二)	嫁入りを……………	(三)	あの眼の……………	(二五)
鉄が錆び……………	(一二)	寄り添へと……………	(四八)	あつかりと……………	(二九)
月に吸はれ……………	(一六)	やうもまあ……………	(七四)	愛人が……………	(二七)
颯風の……………	(三八)	有限も……………	(八三)	秋さらり……………	(二五〇)
追放解除……………	(一四)	云うだけは……………	(一〇三)	あきらめて……………	(二五三)
定食へ……………	(一六)	世も末か……………	(一五)	雨風が……………	(二五九)
嘘をまるめて……………	(一七)	嫁ですと……………	(一三〇)	ある時は……………	(二五九)
売る土地が……………	(二三)	善人が……………	(六三)	蒼空よ……………	(二八三)
運を待つ……………	(三)	雑談の……………	(七〇)	あいの子は……………	(四七)
嘘を云ふたが……………	(四〇)	財産が……………	(一三)	ビールビール……………	(一八五)
嘘と嘘……………	(四三)	全壊と……………	(一三七)	ビールの……………	(一九〇)
うぬぼれを……………	(九五)	大 空		娯楽の如く……………	(二四七)
うんそうだ……………	(一五八)			ポーナスで……………	(二六二)
わが世とぞ……………	(二四)			仏飯へ……………	(三五〇)
私達と……………	(二六)			酎をのむ……………	(一八八)
ワイシヤツも……………	(二七)			父の死に……………	(二七四)
				逢ひたかつた……………	(二六)

父の死後……………	(二七五)	だす入りの……………	(三三三)	嚴父慈母……………	(二九六)
父の汗……………	(二八八)	どもの児に……………	(三三〇)	人並に……………	(一七四)
乳の出る……………	(二九一)	どの兵も……………	(三五〇)	箸紙を書いた……………	(一九四)
父・植木……………	(二九九)	襟垢を……………	(二三三)	初恋の……………	(一九九)
ちんぼこを……………	(三〇一)	日光の……………	(二三三)	薄情な……………	(二〇〇)
父を求め……………	(三三五)	A ² の……………	(三二〇)	初恋も……………	(二〇一)
父として……………	(三八)	夫婦づれ……………	(一七六)	惚れられて……………	(二〇六)
父の名を……………	(三三三)	船は行く……………	(二三三)	本妻が……………	(二〇七)
父ひとり……………	(三三四)	ふられたと……………	(二三四)	惚れて居る……………	(二一〇)
長男の……………	(三三六)	二人きり……………	(二三三)	半襟を……………	(二三三)
父の咳……………	(三四八)	不肖の子へ……………	(三三七)	骨抜きに……………	(三三九)
だまつて……………	(一七セ)	現在に……………	(一八一)	人前は……………	(二三六)
ではこゝで……………	(一八九)	元日を……………	(一九三)	人妻と……………	(二四五)
だらしなさ……………	(二五三)	芸者自身も……………	(二〇九)	人妻の……………	(二四五)
どつかで……………	(一七八)	岐阜提灯の……………	(二二)	薄情と……………	(二四六)
どの子も……………	(三〇六)	減俸の……………	(三八五)	ほほえめば……………	(二四八)

人妻よ……………	(三五)	色事に……………	(三八)	剃刀の……………	(三四九)
昼の風呂……………	(三五八)	云い出した……………	(二四〇)	稼ぐ母……………	(三四四)
箸紙を父……………	(二六三)	慰謝料の……………	(二四三)	蚊の中で……………	(三四一)
畑の中……………	(二七一)	椅子の脊に……………	(二四九)	この村も……………	(三三八)
ひとりひとり……………	(二八六)	胃病の子まま子……………	(三〇四)	帰朝して……………	(三〇〇)
母と子の……………	(二八七)	いつしかに……………	(三〇八)	腰が抜けた……………	(一七一)
一人子の……………	(三二)	一周忌……………	(三九)	火事か火事……………	(一七九)
母親は日の……………	(二九三)	胃病の子絵本……………	(三三)	君の酒は……………	(一八三)
人並に……………	(二九四)	一銭の……………	(三八)	君の顔で……………	(一八六)
ハンモック……………	(三〇三)	慰問文……………	(三五)	敬遠を……………	(一九四)
母の子に……………	(三〇九)	十二月首だけ……………	(一八一)	かんにんして……………	(二〇〇)
母親は人出を……………	(三三六)	十二月まがり……………	(一八七)	衣摺れに……………	(二〇三)
母の事……………	(三三〇)	銃後銃後……………	(一九六)	恋人が……………	(二〇三)
花見に……………	(四八)	女中では……………	(二〇)	恋人の……………	(二〇三)
一合の……………	(一七六)	地でゆくか……………	(二四六)	木の葉を……………	(二〇四)
いつになく……………	(一八九)	情痴の……………	(二四八)	かたくなな……………	(二〇八)

唇は……………	(二〇九)	子等の浴衣の…	(二六九)	風よ吹け……………	(三〇七)
気の弱い……………	(二一一)	けふの父は……………	(二七二)	腰が碎けた……………	(三〇八)
恋しさが……………	(二一六)	校長と……………	(二七三)	被 ^{きて} 人のない……………	(三三三)
転げ込んで……………	(二一九)	くびきりに……………	(二七三)	子を死なし……………	(三四四)
きつちりと……………	(二三三)	国の父に……………	(二七四)	子が病んで……………	(三七七)
くされ縁……………	(三七七)	黒髪すき下す……………	(二七七)	金持を……………	(三八八)
恋の罫……………	(三八八)	子が出来て……………	(二七八)	子沢山子に……………	(三三一)
恋をしてる……………	(三三〇)	靴下を……………	(二七九)	首つりは……………	(三三一)
金ですむ……………	(三四〇)	気違ひじみた……………	(二八三)	子のことで……………	(三四四)
きつと来て……………	(三四三)	かし家は……………	(二八五)	子沢山僕の枕……………	(三三九)
くちづけへ……………	(二四九)	苦労が……………	(二九〇)	みな呑んで……………	(一九一)
首しめた……………	(二五三)	髪結はぬ……………	(二九三)	まあ／＼と……………	(一九一)
子にやつた……………	(二五七)	慶応に……………	(二九三)	みだれ籠へ……………	(二〇四)
子煩惱……………	(二五九)	子よ妻よ……………	(二九七)	まま事の……………	(二一九)
結界の……………	(二六一)	子供服……………	(三〇三)	真似したり……………	(三三三)
蚊帳の中で……………	(二六九)	子を泳がせて……………	(三〇五)	まちぼけを……………	(二四四)

操など……………	(三三)	ママとなり……………	(三四)	名をすてて……………	(三五)
もの思う……………	(三八)	まま母の……………	(三九)	何はなくとも……………	(二六)
もう未練……………	(二四)	もう畑……………	(三九)	汝の父は……………	(三六)
未だ慾あり……………	(三四)	又せんじ薬を……………	(三五)	ネクタイが……………	(三四)
幻の……………	(五一)	なあちろり……………	(一七)	女房に……………	(三四)
木綿着で……………	(二六)	吞ます気で……………	(一七)	名ばかりの……………	(三五)
息子には……………	(二七)	二合罐……………	(一七)	女のいない……………	(一八)
店を休んで……………	(二六)	飲みに来いと……………	(一八)	落ちついて……………	(一八)
萬引で……………	(二九)	女房の……………	(一八)	女遂に……………	(二五)
まああがれ……………	(二九)	のみに来た……………	(一八)	思ひきり……………	(二六)
むつとしたが……………	(三〇)	ナフキンへ……………	(三〇)	拝まれて……………	(二四)
貰ひ子の……………	(三〇)	ねエ愛して……………	(二三)	逢ふだけで……………	(三〇)
みじかしと……………	(三二)	猫入らず……………	(二八)	思ひあがつた……………	(三一)
まだ弟が……………	(三五)	のろけることを……………	(三二)	思はざり……………	(三六)
息子といふ……………	(三七)	泣けて来る……………	(三三)	老らくの……………	(三九)
又辭職……………	(三四)	ネオンの下を……………	(三四)	愚かにも……………	(四五)

俺に似よ……………	(三五)	悵氣から……………	(二九)	炭ついで……………	(三六)
お父さんは……………	(二六)	落第か……………	(三四)	櫻は櫻……………	(三七)
お前がゐたらと……………	(二六)	酒とろり……………	(一七)	サルトルを……………	(三三)
お父さんはネ……………	(二六)	酒女……………	(一七)	失職を……………	(二五)
お父さんの……………	(二六)	酒がいつしか……………	(一七)	さあみんな……………	(二六)
俺の子と……………	(二六)	それから……………	(一五)	資本家で……………	(二七)
親のある……………	(二五)	さて呑むと……………	(一五)	Song が……………	(二七)
お茶漬を……………	(三〇)	その書棚……………	(一七)	洗濯に……………	(二八)
おほきな事実……………	(三四)	三人が……………	(一八)	失礼を……………	(二八)
大男を……………	(三三)	焼酎は……………	(一九)	障子張る……………	(二八)
思はざりき……………	(三三)	酒なんか……………	(一九)	淋しさは……………	(三〇)
お互ひの……………	(三八)	青春を……………	(一九)	三周忌……………	(三六)
俺の妻に……………	(三四)	少女で通す……………	(二〇)	すべりんこ……………	(三三)
PTAに……………	(四六)	親類に……………	(二五)	その母も……………	(三三)
ラウンドガール……………	(一九)	写真だけ……………	(二七)	死にとも……………	(三六)
六疊に……………	(二七)	そのころの……………	(二五)	ストリップに……………	(四六)

樽据へて……………	(一七二)	うれしきと……………	(二三四)	妬かれてた……………	(二八一)
照り照りて……………	(一九〇)	腕の見せどこ……………	(二九四)	簀匠者と……………	(三八)
手紙では……………	(二〇五)	鰻屋の……………	(三〇〇)	ヨイヨーで……………	(三七)
連れたのを……………	(二〇八)	若い燕……………	(二一八)	やけくそで……………	(三九)
友達を……………	(二二〇)	割箸を……………	(二二九)	よう降りまん……………	(三五)
たべさしを……………	(二二六)	別離 ^{わかれ} の言葉に……………	(二四二)	坐食して……………	(一八〇)
抵抗の……………	(二三三)	わかれたら……………	(二五二)	膳に左して……………	(三二)
ただ歩く……………	(二三四)	わがままを……………	(二六七)	不 死 鳥……………	
鳳あがり……………	(二六)	笑はぬ父に……………	(二八四)	安産に……………	(三五九)
父親に……………	(二七二)	酔ふて来ると……………	(一七三)	逢状の……………	(三七三)
妻や待たむ……………	(二七六)	酔うて来て……………	(一九五)	合住居……………	(三八八)
てんてこ……………	(二九〇)	行末は……………	(一九八)	愛情の……………	(三八七)
妻の名の……………	(二九八)	妖艶を……………	(三三五)	諦めて……………	(四三五)
年頃は……………	(三二)	湯ざめする……………	(二六六)	哀史一篇……………	(四三八)
妻だけが……………	(三四三)	家賃だけ……………	(二八〇)	ああほんに……………	(四四八)
噂に……………	(二二)				

アルミニウムか	(四七四)	病院は	(四二)	伊達巻の	(三六三)
新らしい	(四八六)	バラツクへ	(四一七)	脱穀機	(三九九)
アダム・スミスを	(五二)	ペンチャラを	(四四三)	同窓も	(四一〇)
悪友を	(五四二)	莫迦は	(四六八)	泥縄の	(四四五)
朝顔の	(五五〇)	番傘に	(五一九)	だがしかし	(四二八)
あのダイヤ	(六一四)	文学を	(五三四)	同情の	(四五四)
青いソフト	(六四八)	僕は医者	(五六七)	どつちつかずの	(四七九)
哀れ	(六五一)	馬鹿な話だ	(六三四)	電車賃も	(五〇五)
あんたのやうに	(六五二)	醜男の	(六三五)	代表の	(五三七)
味は知らねど	(六六三)	病臥して	(六六四)	出は出たが	(五六一)
朝霧の	(六八三)	舞台	(六八六)	大根を	(六二三)
あすか川	(六八四)	近道に	(四九七)	伝票の	(六一五)
案内人	(六九一)	チャリツプ	(五四〇)	童貞か	(六二八)
仏壇は	(三六八)	近頃の	(六三)	代診は	(六三)
病院の	(三八六)	一寸来て	(六八九)	だしぬけに	(六八一)

絵馬堂の……………	(五九四)	河豚だ……………	(五三四)	外国の……………	(四四五)
エプロンを……………	(五九九)	古本屋……………	(五三三)	月末の……………	(四九四)
宴会が……………	(六四九)	副業を……………	(五三八)	仰山に……………	(五〇一)
栄転の……………	(六六五)	計を聞いて……………	(五四六)	下宿した……………	(五〇一)
園公の……………	(六七四)	不渡りは……………	(五七四)	学校の……………	(五一八)
附録だけで……………	(三八四)	不景気が……………	(六〇一)	学校とは……………	(五五七)
ふるさとは……………	(四一九)	古着屋は……………	(六四七)	現在の……………	(五六〇)
ふるさとの……………	(四三六)	ふたりふたり……………	(六六〇)	芸者……………	(六一五)
二人して……………	(四五六)	伏屋にも……………	(六七七)	戯曲に……………	(六三七)
藤の棚……………	(四八三)	船を忘れる……………	(六八三)	原稿紙へ……………	(六六五)
婦人記者……………	(四八四)	御降下の……………	(四二五)	五明樓……………	(六八五)
古い値を……………	(五〇〇)	餓死線へ……………	(四二七)	学童へ……………	(六九三)
不孝者……………	(五〇六)	学鷺へ……………	(四三二)	ひげを剃る……………	(三五八)
古本を……………	(五一五)	軍属の……………	(四三七)	日は東……………	(三六六)
歩をついた……………	(五一九)	外科を……………	(四四八)	必要な……………	(三七〇)

火の見櫓……………	(三九一)	返事だけ……………	(四七七)	花道の……………	(六〇七)
一ト幕見……………	(三九三)	人の声に……………	(四八五)	本堂で……………	(六〇七)
必要以上に……………	(四〇〇)	落籍されて……………	(四九九)	本堂の……………	(六一〇)
薄情が……………	(四〇三)	引止めて……………	(五〇九)	本堂を……………	(六二二)
薄情な……………	(四〇四)	ひるひなか……………	(五一四)	日永には……………	(六一六)
春もやや……………	(四二四)	人前は……………	(五二九)	箱乗りも……………	(六二〇)
配給を……………	(四三九)	昼寝から……………	(五三六)	本店は……………	(六三六)
白米の……………	(四三〇)	宝石に……………	(五四七)	浜辺まで……………	(六三九)
饂飩へる……………	(四三三)	肺である……………	(五五七)	本店が……………	(六三三)
朗らかさ……………	(四三四)	鼻の偉大さ……………	(五六八)	浜へ出りや……………	(六四〇)
日ぐるまも……………	(四五〇)	人妻の……………	(五七六)	はらませる……………	(六五一)
拾ひ屋の……………	(四五二)	一皿は……………	(五八〇)	妃殿下に……………	(六五七)
人妻に……………	(四五六)	人の下駄……………	(六〇三)	引継ぎの……………	(六七三)
香港は……………	(四六四)	人質の……………	(六〇三)	箸の国……………	(六七五)
時鳥から……………	(四七〇)	日一日……………	(六〇六)	人の世の……………	(六八三)

一人旅……………	(六八三)	いのちがけで……………	(五四九)	十二月自分の……………	(三六二)
久方の……………	(六八四)	乾イヅム……………	(五五一)	情報……………	(三八一)
一匣べつたり……………	(六八六)	言訳も……………	(五七〇)	ジリ貧に……………	(四一八)
花見茶屋……………	(六九四)	椅子ばかり……………	(五七七)	十二月うれしい……………	(五三六)
今立つた……………	(三六五)	一平へ……………	(五八一)	自分の好きな……………	(五三八)
遺髪が戻り……………	(三九五)	入歯の……………	(五九二)	獸人に……………	(五五八)
落なんか……………	(三九六)	イイをして……………	(五九三)	十八間戸……………	(六九三)
一万や……………	(四二六)	意見した……………	(五九七)	君僕と……………	(三六一)
衣料切符……………	(四四〇)	いつづけの……………	(六三〇)	金拾うた夢……………	(三七二)
色気ぬきを……………	(四七六)	いのちさへ……………	(六三三)	北風へ……………	(三七二)
意気張で……………	(四七六)	居候が……………	(六三三)	腰が立てば……………	(三七五)
いひすぎた……………	(四八九)	板の間に……………	(六三六)	書置も……………	(三八二)
今見れば……………	(五〇〇)	犬洗ふ……………	(六四五)	公報を……………	(三八三)
許嫁……………	(五〇七)	一周忌……………	(六八〇)	菊植えて……………	(三八五)
生きとし……………	(五三三)	色々威……………	(六八七)	組見の……………	(三八七)

故郷では……………	(三八九)	買溜めに……………	(四七五)	米の値に……………	(五三二)
苦の世界……………	(三九四)	君君憂鬱を……………	(四七九)	絹夜具の……………	(五三七)
会話科に……………	(三九四)	食ふための……………	(四八三)	懸取を……………	(五四五)
君とも……………	(四〇五)	苦楽園……………	(四九一)	このごろは……………	(五五六)
黄菊白菊……………	(四〇八)	靴下を……………	(四九二)	供託に……………	(五五九)
けろりかんと……………	(四一〇)	これだけを……………	(四九六)	黒い鞆へ……………	(五五九)
供出を……………	(四二二)	稼がねば……………	(四九六)	観賞の……………	(五七五)
起重機の……………	(四二三)	これ位に……………	(五〇四)	風すこし……………	(五八一)
兼務々々……………	(四三三)	金ためて……………	(五〇四)	考が……………	(五八五)
看護婦と……………	(四三六)	借りる気で……………	(五〇五)	雲助の……………	(五八七)
掛軸が……………	(四三六)	心得て……………	(五〇八)	寄贈品……………	(五九〇)
米の値も……………	(四六三)	けむだしの……………	(五一〇)	解決を……………	(六二三)
気兼ねして……………	(四六五)	かたつむり……………	(五二二)	殺すことに……………	(六二七)
苦学した……………	(四六九)	書置の……………	(五二五)	今日中に……………	(六三五)
還暦も……………	(四六九)	恋のない……………	(五三五)	活劇の……………	(六三七)

このごろの……………	(六三七)	襲ね着で……………	(六六七)	もう泣かぬ……………	(五五五)
気楽さは……………	(六三九)	清盛へ……………	(六八九)	貧しさの……………	(五八二)
形見分で……………	(六四〇)	干潮の……………	(六八九)	マーケツト……………	(五八四)
かなもけりも……………	(六四一)	京の夏……………	(六九五)	道眞を……………	(五八八)
広告塔……………	(六四一)	この鮎は……………	(六九七)	道ばかり……………	(五九三)
孝行は……………	(六四四)	この村の……………	(六九八)	儲けてる……………	(六〇四)
光明の……………	(六四五)	向ひの貸家……………	(三七七)	名人は……………	(六三二)
かなしくも……………	(六五九)	麦の秋……………	(三九九)	門弟の……………	(六三七)
薬湯の……………	(六六七)	未亡人……………	(四〇六)	虫なくを……………	(六四三)
近衛さん……………	(六七二)	見はらしを……………	(四四四)	未亡人……………	(六五五)
官舎の灯……………	(六七六)	鷹一步……………	(四四七)	眼も涼しかる……………	(六六一)
君も征くか……………	(六七八)	妾とも……………	(四五九)	待つたなしの……………	(六六六)
君の子が……………	(六七八)	もういらぬ……………	(四九八)	村田さん……………	(六七三)
旧温泉……………	(六八五)	胸の痛みを……………	(五二八)	三七日へ……………	(六七六)
心ここに……………	(六八七)	豆香水……………	(五三三)	又飲みに……………	(六七九)

みち足れる……………	(六八三)	二階のに……………	(四三七)	鶏を……………	(六〇九)
むかしむかし……………	(六八四)	日本髪……………	(四六七)	ナフキンを……………	(六二)
無造作に……………	(六八六)	葱赤燕……………	(四七〇)	軒店へ……………	(六九)
みのむしの……………	(六八九)	二月の……………	(四七二)	寝転ぶ癖の……………	(六七七)
宮様と……………	(六九〇)	俄雨……………	(四七八)	二十六羽……………	(六八八)
見てくれと……………	(六九二)	名古屋胴……………	(四八三)	奈良の宿……………	(六九〇)
虫すだく……………	(六九二)	内職で……………	(四八五)	七転び……………	(六九三)
無くなると……………	(三六七)	人形に……………	(四八八)	奈良二郎……………	(六九三)
新嫁の……………	(三六九)	慰めて……………	(四九三)	寝仏を……………	(六九四)
二号を持つて……………	(三七九)	人形を……………	(五〇七)	寝仏の……………	(六九四)
流れ作業……………	(三六九)	握らせる……………	(五四八)	名も知らぬ……………	(六九七)
握らせりや……………	(四〇六)	泣きごととは……………	(五六六)	送り人の……………	(三七〇)
軒先に……………	(四二)	日本びいき……………	(五八九)	女また……………	(三九六)
農村の……………	(四二五)	女房に……………	(五一)	踊の輪……………	(四二)
人参や……………	(四二六)	後添が……………	(五九六)	お見外れを……………	(四三)

お膳が出た……………	(四三九)	奥さんの自慢の…	(五七九)	裸女の……………	(五八九)
をかしさはあいつ……………	(四四三)	俺は彼を……………	(五九五)	論文の……………	(六四九)
をかしさは鯨の……………	(四四六)	女の笑ひ……………	(六一七)	裸婦かたずけて……………	(六六四)
おばアさんの……………	(四六二)	弟の……………	(六三六)	さうださうだ……………	(三五六)
おツさんも……………	(四六六)	おなじみの……………	(六五三)	拘られたを……………	(三五七)
女社長……………	(四七一)	お気の毒……………	(六五四)	思案する……………	(三五八)
俺はもう……………	(四八九)	オープンへ……………	(六五四)	祝電へ……………	(三六〇)
大阪へ来て……………	(五〇二)	大阪も……………	(六五八)	石嶺を……………	(三七四)
奢られて……………	(五一六)	往診に……………	(六六九)	四十では……………	(三七八)
踊子へ……………	(五二七)	おもむろに……………	(六七二)	正月も……………	(三八〇)
女十八……………	(五三四)	折も折……………	(六七四)	少し貸せと……………	(三八〇)
奥さんの鼻……………	(五三六)	お百度も……………	(六九一)	斜陽族……………	(三八三)
大男一丁先を……………	(五六四)	料理本……………	(三七七)	主婦としての……………	(三八四)
お金を……………	(五六六)	落選へ……………	(四二三)	すしだけで……………	(三八六)
大男母を……………	(五七六)	裸婦を……………	(五四七)	水車小屋……………	(三九三)

さて金となると……	(四〇三)	選挙違反……	(四五三)	死所として……	(五二〇)
商売は……	(四〇四)	赤心一票……	(四五四)	砂ぼこり……	(五二九)
せつかちの……	(四〇九)	職人同志……	(四五九)	青春を……	(五三〇)
世話好きが……	(四〇九)	寝台を……	(四六〇)	スタートを……	(五三三)
新築新築……	(四一三)	涼しさは……	(四六一)	スピーチを……	(五三九)
疎開の子……	(四二一)	水兵に……	(四六六)	失望が……	(五四一)
シヤツよりも……	(四二三)	スキツチを……	(四六六)	霜やけて……	(五四三)
志士として……	(四二三)	糺売屋……	(四八一)	寒がりか……	(五四六)
脊の高さ……	(四三〇)	資本家の……	(四九〇)	素つばだか……	(五四九)
戦術に……	(四四〇)	観衣一枚……	(四九三)	櫻は白け……	(五五三)
祖国あるのみ……	(四四一)	すすめられ……	(四九七)	先方の……	(五五四)
ソアラ―機……	(四四五)	借金か……	(五〇三)	空は晴れたり……	(五六三)
さすが銃後……	(四四六)	資本家は……	(五一二)	障子さへ……	(五六九)
聖書一冊……	(四四九)	叱らずに……	(五二三)	素麺に……	(五七一)
千人針……	(四五〇)	すき焼と……	(五二三)	三代も……	(五七三)

尺八を……………	(五七)	襯衣一枚で……………	(六三)	さあ動きますと……………	(六七)
その座敷……………	(五七)	新店は……………	(六三)	新築へ……………	(六七)
支那炭を……………	(五三)	品切れに……………	(六三)	その船出……………	(六七)
職人へ……………	(五五)	誘うても……………	(六三)	知らぬまに……………	(六八)
借金で……………	(五六)	品切れで……………	(六四)	その子等は……………	(六六)
その乞食……………	(五一)	草葬の臣……………	(六四)	連れ出すに……………	(六六)
先代は……………	(五七)	鹿おもへらく……………	(六四)	爪弾の……………	(六七)
死ぬ気で……………	(五八)	せんべいの……………	(六五)	妻に中将湯を……………	(三七)
賽銭の……………	(五九)	さう聞けば……………	(六五)	立ち廻りの……………	(三九)
村長を……………	(六〇)	松花堂へ……………	(六五)	手の染まり……………	(三九)
袖口で……………	(六〇)	その額も……………	(六五)	他殺やろうと……………	(三八)
先妻は……………	(六〇)	信心で……………	(六四)	つれないと……………	(四〇)
昇降機……………	(六一)	時雨れてる……………	(六五)	誰の墓だか……………	(四〇)
寒さは……………	(六九)	水族館に……………	(六八)	停電の……………	(四二)
親切を……………	(六二)	水族館おこぜと……………	(六八)	次の間で……………	(四四)

附き合ひで……………	(四一五)	とは云ふものの…	(五三三)	東洋の……………	(六六〇)
泰にゐる……………	(四三七)	手を貸せば……………	(五五七)	停年は……………	(六六九)
敵前上陸……………	(四四四)	銃先の…………… つさき	(五六三)	頼むよと……………	(六七三)
とろろ昆布……………	(四五二)	面当ての……………	(五六五)	遠く来て信濃に…	(六九六)
包紙に……………	(四五二)	定食の……………	(五七一)	謹んで……………	(六八八)
台風へ……………	(四五八)	使ひきれない……………	(五七四)	丹前は……………	(六八七)
燈下管制……………	(四五八)	大金に……………	(五八三)	田辺節……………	(六八五)
箕盆……………	(四六〇)	風つひに……………	(五八七)	遠く来てあらしの	(六八二)
戯れに……………	(四七七)	党のため……………	(五九五)	うすぐもり……………	(三九〇)
尊くも……………	(四八四)	誰が捨てた……………	(六一九)	売食ひが……………	(四二〇)
つりの多い……………	(四八七)	盗壘へ……………	(六二五)	牛老ひて……………	(四三四)
泊り客……………	(四八七)	十日戎……………	(三六六)	売上の……………	(四八〇)
とりまきを……………	(五二三)	天皇へ雨も……………	(六五五)	うれしさに……………	(四九三)
当選に……………	(五二七)	天皇も……………	(六五六)	嘘にして……………	(四九四)
定食に……………	(五三九)	天皇へ民の……………	(六五八)	うざくかと……………	(六〇三)

うなされる……………	(六四七)	焼蕎で……………	(四一九)	雇はれて……………	(六四四)
嘘ばかり……………	(六五〇)	闇市の……………	(四二八)	浴衣掛……………	(六五九)
忘れてくれと……………	(四〇三)	羊羹のすこし……………	(五〇九)	行き先も……………	(六六一)
腕白が……………	(四三六)	よく来たと……………	(五三三)	よしや道は……………	(六六八)
我々が……………	(四七三)	夢を見て……………	(五四三)	喜びの……………	(六七〇)
ワイシャツの……………	(五四四)	山の上……………	(五五一)	宿の二階……………	(六八二)
洋室へ……………	(三六〇)	世の中を……………	(五六二)	吉野山……………	(六八六)
嫁にやつた……………	(三六三)	羊羹のことで……………	(五七二)	八重櫻……………	(六八九)
誘惑を……………	(三六四)	夜店出し……………	(五七三)	ゆびさすは……………	(六九一)
行くだけの……………	(三七三)	屋根に出て……………	(五七九)	夕櫻とんぼ……………	(六九五)
よきことも……………	(三七六)	いふまでも……………	(五八四)	俗曲へ……………	(四〇〇)
よく怒る……………	(三七八)	柳行李……………	(六〇一)	贅沢は……………	(四一四)
よいところ……………	(三九〇)	世の苦勞……………	(六〇五)	残置燈……………	(四七二)
夕櫻……………	(四〇一)	行末を……………	(六〇八)	全快だ……………	(四七三)
ヤミ出来ぬ……………	(四一六)	夕刊の……………	(六三四)	雑兵に……………	(五一一)

麻生路郎川柳句集

旅人



昭和廿八年十一月廿五日 印刷
昭和廿八年十一月三十日 発行

定 價 八 百 円

著 者 麻 生 路 郎

大阪市北区濱崎町一八

印刷所 大 阪 出 版 堂

麻生路郎川柳生活五十年記念

発行者 路 郎 句 集 刊 行 会

会 長 中 島 生 々 庵

大阪市南区三休樓南詰
中島小児科診療院内

大阪市住吉区万代西五の二五

発 行 所 川 柳 雜 誌 社

振替大阪七五〇五〇

麻生路郎・主宰

(創刊大正十三年)

川柳雜誌

誌代一部四〇円 送料四円

半ヶ年 二六四円 共

一ヶ年 五二八円 共

本誌は斯界の最高峰の柳誌、内容の充実と誌代の低廉は本誌の誇りとするところ。現柳壇へ幾多の名家を送り出した本誌は貴方が柳壇への登龍門として選ぶべき最良のものである。即刻申込まれたし。(切手代用可)

深く研究を続けたい人

人のためには川柳不朽洞

会へ入会の便宜がある

発行所

川柳雜誌社

振替口座 大阪 七五〇五〇

大阪市住吉区内万代西五丁目二五零地